



北九州市にある勝山公園で路上生活をしてきたホームレス者が住んでいた「家」

# 自立生活援助ホーム 「抱樸館下関」から見える ホームレス問題

## ホームレス問題を考える I

格差や貧困層の拡大がすすみ市民社会が荒廃しつつある中、それに輪をかけるかのようにアメリカのバブルが弾け世界経済は一気に恐慌へ突入しました。日本でも派遣切りや雇用の打ち切り、学生の就職内定取り消しなど、先行き不透明な様相はますます厳しくなっています。誰もがいつでも会社を追われ、家を追われ、路頭に迷い、野宿生活者になっても不思議ではありません。今や「ホームレス問題」は他人ごとではないのです。

グリーンコープはかねてよりNPO法人北九州ホームレス支援機構（代表奥田知志さん）を支援しています。その一つである自立生活援助ホーム「抱樸館下関」を取材し、「ホームレス問題」を追ってみました。



抱樸館下関入居者の部屋。家賃・食事費・その他雑費など生活保護費から払って生活をしている

2006年1月、夜半に起こった下関駅放火事件。その事件がきっかけとなって一気に進展したことがあります。ホームレスの自立支援を目的とした「抱樸館下関」の開設です。

放火したホームレスは75歳の老人。刑務所を出所したばかりで身寄りもなく市役所に相談に行っても相手にされなかったそうです。奥田さんは、「野宿状態を脱するために刑務所に入るしかない」と思い放火した」という彼の言葉で抱樸館の開設を決断したと言います。放火は決して許されることではありません。しかし、今の社会が彼を受け入れることができなかつたことも事実です。

奥田さんは「彼のホームになりたい」と、服役中の彼と手紙のやり取りをしています。彼を一人の人間として迎えるために。

元ホームレスが人として生き直すために「抱樸館下関」は築43年の元旅館を使っています。古い作りですが、木の温もりが残る心地よい趣を醸し出しています。2007年4月に開設されて今年で丸2年。現在、23人の入所者が野宿生活から自立することをめざして日常生活を営んでいます。



抱樸館下関の館長・秋本充さん

1階フロアは入所者が共同できる場として改装しました。食事を共にするのはもちろん、一緒にテレビを見たり、語りあつたり、入居者同士が触れあえる空間となつています。食事の席が一定回数でローテーションされ、いろいろな人と話ができるよう配慮されているのも抱樸館下関の長です。

### 抱樸館（ほうぼくかん）の由来

みんな抱（いだ）かれていた。眠っているに過ぎなかった。泣いていただけだった。これといった特技もなく力もなかった。重みのままに身を委ね、ただ抱かれていた。それでよかった。人は、そうしてはじまったのだ。ここは再びはじまる場所。傷つき、疲れた人々が今一度抱かれる場所—抱樸館。

人生の旅の終わり。人は同じところへ戻ってくる。抱かれる場所へ。人は、最期に誰かに抱かれて逝かねばなるまい。ここは終焉の地。人がはじめに戻る地—抱樸館。

「素を見し樸を抱き」—老子の言葉。「樸（ぼく）」は荒木（あらぎ）。すなわち原木の意。「抱樸」とは、原木・荒木を抱きとめること。抱樸館は原木を抱き合う人々の家。山から伐りだされた原木は不格好で、そのままではとても使えない。だが、荒木が捨て置かれず抱かれる時、希望の光は再び宿る。

抱かれた原木・樸は、やがて柱となり、梁となり、家具となり、人の住処となる。杖となり、楯となり、道具となって誰かの助けとなる。芸術品となり、楽器となって人をなごませる。原木・樸はそんな可能性を備えている。まだ見ぬ事実を見る者は、今日、樸を抱き続ける。抱かれた樸が明日の自分を夢見る。

しかし樸は、荒木である故に少々持ちにくく扱い辛くもある。時にはささくれ立ち、棘とげしい。そんな樸を抱く者たちは、棘に傷つき血を流す。だが傷を負っても抱いてくれる人が私たちに必要なのだ。樸のために誰かが血を流す時、樸はいやされる。その時、樸は新しい可能性を体現する者となる。私のために傷つき血を流してくれるあなたは、私のホームだ。

樸を抱く—「抱樸」こそが、今日の世界が失いつつある「ホーム」を創ることとなる。ホームを失ったあらゆる人々に呼びかける。「ここにホームがある」、「ここに抱樸館がある」と。

ここから自立していった人がスタッフとして協力してくれるようになることはホームレス支援運動の目的でもありません。本当の意味でもホームレスの辛さや孤独を知り尽くしているのだから、それに勝るものはありません。そこを助けあいの原点だと言えます。

野宿では住所不定で受けられなかつた生活保護費が抱樸館下関に入所したことを受けられます。その中から家賃や食費を支払ってもらいますが、極力入所者の手元に自立のための資金が残るようにしています。しかし、公的な補助もない中で、共に自立プログラムに携わるスタッフの手当でなくても捻出しなければならず、その運営は中々に厳しい状況です。

「ホームレス」とは、物理的な家（建物としてのハウス）ではなく精神的な心の拠り所のこと。人と人の関係や家族関係などがそれを育みます。「ホームレス」とはそのような関係を喪失していることなのです。「何より辛かつたことは、話す人もなく一人ぼっちだったこと」と元ホームレスの人は言います。人との関係を絶つて生きることは人間としての尊厳さえ失うことなのだとも。住む所さえ手当てすればよいという話ではありません。

また、全国的に後を絶たない子どもたちによるホームレス襲撃事件。中高生が

「ホームレス」と「ハウスレス」は違う

「ホーム」とは、物理的な家（建物としてのハウス）ではなく精神的な心の拠り所のこと。人と人の関係や家族関係などがそれを育みます。「ホームレス」とはそのような関係を喪失していることなのです。「何より辛かつたことは、話す人もなく一人ぼっちだったこと」と元ホームレスの人は言います。人との関係を絶つて生きることは人間としての尊厳さえ失うことなのだとも。住む所さえ手当てすればよいという話ではありません。

北九州ホームレス支援機構のミッションに連帯する

グリーンコープは生活再生事業の一環として、現在福岡県と共同で多重債務者からの相談を受けています。この事業からも、人が多重債務に陥る原因は自己責任ではなく、社会の有り様が大きく関係していることが明らかになってきました。ホームレス生活から抜け出すために何とかできないかとグリーンコープの生活再生相談室に相談したことが

きつかけで「抱樸館下関」と出会い、自立に向けて頑張っている元ホームレス者もいます。

「二人の路上死もださないう」一人でも多く、一日でも早く路上からの脱出を「ホームレスを生まないう社会の創造を」。これら3つのミッションを掲げ、そして、「あなたも、わたしも、おんなじのち」を合言葉に、北九州ホームレス支援機構は日々活動を展開しています。その取り組みに連帯すること。それが豊かな地域づくりをめざしているグリーンコープだからこそできる「ホームレス支援」だと言えます。

否応なく襲ってくる経済恐慌という嵐を、グリーンコープは組合員や地域の人々の相互の助けあいによって乗り越えていきたいと考えています。ホームレス問題を地域再生運動の一環とし、共に生き、やわらかく助けあえる社会をめざして取り組みをすすめていきます。